8月某日、セルジュ・ゲンズブールを追ったドキュメンタリー・フィルム「ノーコメント by ゲンズブール」を観てきた。その中で何よりも印象的だったのは彼の目だ。

私は突出した人生を作る人は、大概何らかのコンプレックスを抱えていると思う。それは完璧に近いところにある一点の否定だ。例えば他の全ては整っているのに、顔立ちがヴィジュアル系でないとか、身長が低すぎるとか、本人の努力ではいかんともしがたい一点の為に、それを克服する道を模索する。その努力がその人を押し上げると思う。セルジュ・ゲンズブールの場合も、そのコンプレックスの中から見出した人生だったと思う。ロシア系ユダヤ人の血を引くフランス人である彼は、常にユダヤ人特有の鼻の形から顔について否定され続け、ずっと顔に対するコンプレックスを持ち続けた。そして子供の頃の彼は、大人に言われるままにナチスの追撃をかわさなければならなかった。彼の父親は、列車の中で自分の絵を盗まれたことで画を辞め、息子のセルジュを美術学校に行かせた。成程、彼の感性は視覚的なものからきているのかと納得したシーンだった。同時に彼の父はクラブに出演する演奏家であったため、幼い頃からセルジュにかなり厳しくピアノのレッスンを施した。そしてセルジュは内気な子供だった。父親とは心を割って話すこともなかったが、決して父を憎んではいなかった。むしろもっと対話しておけばよかったと回想している。そして子供の頃受けた厳しさは悪い方へ反映されることなく、自分の子供に、あるいは他人の子供に優しい目を持ち続けた。そう、優しい目。静かで深く広い湖のように澄んだ目。それは世間の風に揺らぐこともなく、いつも静けさを湛えていて生涯変わることがなかった。フィルムの中のゲンズブールの目の中の情景は、どのシーンでも変わらなかったし、自分の子供を見た瞬間に深まった目の表情の変化には、波及的美しさがあった。

思うに人生は紆余曲折、様々な出来事がある。そして人はその状況によって目の中の心の反映の色が変わる。特に目には欲や計算が現れる。けれどゲンズブールの目、そしてフィルムに登場したバルバラの目、ピアフの目。彼らの目にはそういう光りはなかった。むしろしっかりした意思を湛えていた。それは日常茶飯事の喜怒哀楽に左右されることなく、生きる極限から立ち上がり、歩き続けていく静かなエネルギーではないかと思う。改めて驚いたのは、フィルムの中に登場したピアフの目。直感的に人の善し悪しを見抜く硬くない、けれど力強く落ち着いた目は、物事を受け入れ懐に受け止めることができる目だった。顔を否定され続けるゲンズブールに対して「そんなことはない。いい目をしている」と言った言葉に、真実のその人を見抜く目が宿る。

そして生き方について。ゲンズブールは「夢見るシャンソン人形」で一躍名を馳せた。そして作詞作曲・演奏活動を中心に映像の世界にも手を染めた。そこには「常に世間にさらされる」という覚悟があった。本当の自分と世間が見る自分。内気な本来の自分と世間が求める派手な自分。しかしそれは「自分の選んだ道なのだから」と受け入れた。世の中には、本来の自分と虚像の自分の区別がつかなくなる人がいる。その中で目の色が様々に変化して、その時の心の色そのままに浮沈する。けれどゲンズブールは本来の自分に常に立ち戻れたからこそ、自分の人生が維持できた。根源に帰る。その帰巣本能が人生の揺らぎを克服する。「愛されたくないが愛されたい。そう、それが私なのだ」そういう真の自分を知っている目が自分を成り立たせる。(2013.8.17)